

第21講

「避断定的補完動詞」でも「勝手な推量」や「外形的判断」ができます

一般に、「動詞」をそのまま使えば、「断定」や「習慣」「真理」をあらわします（このことは、「推量表現」の認識・理解のためには必要な前提理解です）

そして、『文。』は人間がつくるもので、どんなに客観的に描写したつもりでいてもその内容には主観的なものは避けることができないどころか、主観そのものであるのが現実です（人間は主観的存在であるがゆえに、「偏見」や「勝手な推量」で作文します）

そこで、「作文者」が「主観性」を素直に認めて、「断定」を避けて（責任回避）、「断言できない」「推量」「想像」「遠慮がち」等の思惑を持ち込む場合の手段が「助動詞」や、本講のテーマである「避断定的補完動詞（断定回避的補完動詞）」なのです

本講と次講で考えたいのは、

- ①「助動詞」の実質的な働きは、「避断定（断定回避）」「責任回避」「推量」で、
- ②「助動詞」ではなく「動詞」そのもののなのに、「助動詞」のような「避断定」の意味を内包している「避断定的補完動詞」という「自動詞」があるということです

「避断定」というのは、「断定できないもしくはしない場合」の総称で、「推量」「想像」「非確信」「不確実」「未定」「未確認」「未来」「予定」等、様々な要素・意味内容を含んでいます（詳細は第24講参照）

本来、「助動詞」を学習してから、「避断定的補完動詞」について学習するべきかもしれませんが、「動詞」全体についての学習が一通り終わったあとに、「助動詞」と「仮定法（とかいっているやつ）」を一体的に学習すべきものと考えますので、先に、本講で「避断定的補完動詞」を学習し、次講で「助動詞」を学習することにします

ちなみに、「避断定的補完動詞」の要素を持つ「have to」「want to」「like to」「come to」「get to」「seem to」「appear to」「happen to」等は、実質的には、「助動詞」的な役割を担っていると考えられます

では、本論に入ります

おおよそ、実際に見ているか否かを問わず「避断定」的に表現したい場合は「助動詞」を使い、実際に見た上での外見的判断を表現する場合には「避断定的補完動詞」を使います（「古文」の「視界外推量（らむ）」「眼前推量（めり）」が参考になりますので、「古語辞書」参照）

「避断定的補完動詞」の理解

主語	避断定的補完動詞	補語
He	l o o k s (～に見える)	a d o c t o r . 「名補役」 (事実的)
	s e e m s (～のように思われる)	
	a p p e a r s (～のように見える)	h a p p y . 「形容補役」 (評価的)
	(i s) (断定)	

「f e e l」「s o u n d」も辞書で確認してみてください

「彼は医師のように見える（思われる）。」「彼は幸せのように見える（思われる）。」
というような訳になります（「外見的判断」というのがわかりますか）

次講で詳しく学習しますが、次の「助動詞」を使った例文と比べてみてください

「避断定的補完動詞」の「外見的判断」とは違いますね

（「助動詞」では、「外見的判断」とは異なる視界外の推定も含みますね）

He m a y b e a d o c t o r . （彼は医師かもしれない。）

He m u s t b e h a p p y . （彼は幸せに違いない。）

「避断定的補完動詞」は「特殊な補完動詞」であるということを確実に理解・認識
してください（「形補」「名補」を確実に認識しておさえてください）

次講では、ようやく、「形容節」の検証に入ります

参考として、『「事実」や「評価」の提示』と『「名詞」と「形容詞」の使われ方』の関係について考察しておきます

事実提示（→名主目補）と評価提示（→形修補）

人が他の人や社会に表明したい内容として、
まずは、

①事実伝達（客観的事項）と、②事実を前提とした評価的判断（主観的事項）があり
（「事実伝達」は主に「名詞系」の「主語」や「目的役」「補役」で表現されます）

②評価的判断には、（「評価的判断」は主に「形容詞系」の「名詞修飾」「補役」で表現されます）

Ⓐ社会一般で認められている通常人の評価的判断（主観の多数共通集合体・社会評価・
共通認識・社会常識）とⒷ個人的な評価的判断（一般人の共感を得ていない）があり

Ⓑ個人的な評価的判断には、

㉞将来的には社会常識（将来には一般人の共通認識）になると考えられる評価（先見常識）
と、㉟未来永劫社会常識とはなりえないと考えられる評価とがあります（永劫独善）

以上のような分類が可能かと考えます

総体的には、「事実伝達」では、「名詞」の「主役」「目的役」「補役」が中心となり、
「評価的判断」では、「形容詞補役」「形容詞による名語修飾」が中心となるのです
特に、「名詞系補役」による「主役の言い換え」が難解な場合があるので要注意です
このような分類を意識して「現代文」「古文」「漢文」「英語長文」等に対処すると、
認識力や理解力や読解力に格段の差が生じてくると思います

主に、「事実提示」は「名詞補役」であり、「評価提示」は「形容詞補役」であるのが原則であり
ますが、事実提示が「形容詞」でおこなわれたり「評価提示」が「名詞」でおこなわれたりしたと
しても、それぞれ原則的な性質を失ってはおりません（修辞による「品詞の代用」と考えられます）

① 事実伝達 （客観的事項）		
② 評価判断 （主観的事項）	Ⓐ 社会常識的価値判断	
	Ⓑ 個人的評価的判断	㉞ 先見常識
		㉟ 永劫独善